

6.2 鶏肉

6.2.1 国際市場動向

1) 生産動向

FAOの統計によると世界の鶏生産国は約3, 1992年度の肉類生産量は138.7百万トンの豚肉の64.9百万トンの半額に、牛肉38.8百万トン、とりに肉25.1百万トンの構成である。一方、同年の国際肉取引量は牛肉が5821千トン、豚肉2065千トン、とりに肉2,266千トン計10252千トンの生産量の約10%に相当する量の大部分は生産国の国内消費に回されている。

80年代には工業先進国においては牛肉消費の停滞又は減少、豚肉消費若干の増加(主に中国)鶏肉消費の急激な増加があった。鶏肉への移行は他の肉類に比し価格の低いことや、栄養面からみて脂肪の少ない肉として新しい食習慣の変化によることである。60年代の終り頃から工業先進国の肉類消費は減少した。

鶏肉に關する国際肉類取引の流通は大きく変化があった。ブライスは世界の三大輸出国として米、ECと共に中東市場、中国と台湾は日本市場に野菜として存在したが、80年代に同じECの枠内では輸出税関の課税インセンティブが、ブライスは中東市場に失った。

鶏肉の生産に對する国の政策は国毎に相違があり、相対的に生産の振興に力をつける国は少なく、直接的には輸入のコントロール、間接的には配合飼料の生産に對するインセンティブによる保護が行われている。又輸出税関の課税課税インセンティブの直接的振興がある。又ECは域内にはある配合飼料の自由政策、輸出税関の課税課税政策が採られている。

一般にとりに肉と呼ぶものは合衆国では肉鶏、産卵鶏、ブロイラー、七面鳥、が鳥の合計で、その中肉鶏が75%を占める。又とりに肉は世界の肉類消費量の23%を占め、牛肉と豚肉に次ぐ位置にある。

80年代に世界のとりに肉生産量は56%増の25.5百万トンから90年代末に40百万トンに達した。年間成長率は5.1%以上、肉類の中で最も高い成長率を占める。その20年間に生産量は3倍に増加した。60年代に始まった急激な成長は飼育方法の新しい技術の導入による結果である。1.1%の消費地の変化、購買力の増加など一連の要素が原因である。

そのほか配合飼料の価格の低下、労働生産性の向上、販売量の増加等もとりに肉と他の肉類に比し急激な成長の理由を招いている。

生産をよるに、向の大部分は、国内で消費され、生産量の約7%程度は、国外に取
引された。たゞ、一部の国にたいしては、フランスやドイツは、国内生産量の30%近くは輸出した
と云うものがある。

又、世界の平均生産量の64%は、工業先進国で生産され、36%は、開発途上国で生産された。
1987年、年平均成長率は、後者の国は、約2.7%、前者は、3.8%と違、相違した。

大陸別では、北アメリカとヨーロッパは、約43%の生産量を占め、この両者は、世界の生産量の53%を占め、
南米の生産量は、世界の生産量の約10%程度であり、中でも、ブラジルの生産は、圧倒的に大きい。

国別では、米国の最大の生産国から輸出国である。その生産量の世界供給量は、27%を占め、
311百万トンを、これに次いで、ECが世界供給量の14%を占め、600万トンの生産と輸出した。

表 135 世界の小麦類飼育数 (1961)

地域別	飼育数		内生産量	
	100万頭	%	100万ト	%
アフリカ	4693	42.4	9990	24.4
北アメリカ	2062	18.6	12300	32.5
ヨーロッパ	1252	11.3	8257	20.2
旧ソ連国	1160	10.5	3000	7.3
南アメリカ	924	8.3	3920	9.6
アジア	884	8.0	1895	4.6
大洋州	86	0.8	520	1.3
世界計	11061	100.0	40891	100.0

出典: FAO

表 136 世界の小麦類飼育数 ~ 2010年

国別	1987	1988	1989	1990
中国	2117	2187	2278	1984
米 国	1226	1393	1460	1460
旧ソ連	1174	1177	1207	1151
フランス	523	520	501	550
インドネシア	428	477	489	509
日本	343	334	334	334
インド	213	260	300	310
メキシコ	243	250	252	247
ブラジル	218	248	241	207
その他	3804	4029	4055	4305
世界計	10293	10875	11157	10770

出典: FAO

表 117 世界の牛肉生産量

国 別	1987	1988	1989	1990
米 国	9,103	9,426	10,105	10,924
中 国	5,784	5,995	6,123	6,371
日 本	2,564	3,080	3,177	3,803
イギリス	3,000	3,235	3,300	3,300
フランス	1,970	1,950	2,090	2,417
ドイツ	1,432	1,443	1,442	1,418
オランダ	1,384	1,387	1,425	1,384
韓国	1,023	1,076	1,102	1,104
スウェーデン	994	1,048	1,011	1,026
オーストラリア	797	828	831	836
ニュージーランド	707	689	640	783
その他	540	582	623	661
南アフリカ連邦	535	546	548	551
合計	58,766	59,553	58,766	57,922
合計	35,709	37,238	38,283	39,870

出所: FAO

上表に示す通り、相対 EC の牛肉生産量の 43% を占め、中国と日本の連関は同じ水準で推移している。工業先進国の中で日本は牛肉の生産量大に占める世界生産の 4% を占める。東ヨーロッパ諸国（ハンガリー、ポーランド）は重要な生産国である。

2) 世界の消費傾向

世界の牛肉消費の傾向は、コストの低減と牛肉の生産量の増加である。生産コスト（穀物、大豆、飼料、薬物等）の低減もまた牛肉生産の増加に寄与している。

国際牛肉の統計によれば、世界の牛肉消費の 70% は工業先進国に集中している。中でも相対需要の最も大きいのは、年約 11 百万トンに達する牛肉消費である。生産量の増加に伴って EC の牛肉消費の地位は低下し、年約 6.5 百万トンに縮小傾向にある。南米の牛肉消費は、日本に次ぐ消費国として 11 百万トンに達する傾向にある。

この傾向は牛肉消費の増加率で見ると、相対的に平均 5% EC 7% 程度、高消費国に集中している。1人平均の消費量は、相対的に中国（293kg）と日本（142kg）の消費量は高い。中国は相対的に牛肉消費量の増加率が高く、牛肉の消費量は増加している。日本、EC 及び南米の1人平均消費量は 80年代を通じて

で11月より35%の増加であった。

日本の場合動物蛋白質は肉の増加に習順と見られる。所得の増加、ファーストフードの普及から牛肉や鶏肉の消費が急激に増加した。米国産の KENTUCKY FRIED CHICKEN や MAC DONALD'S 等 鶏肉のペースと肉類生産の進捗が 鶏肉消費の増加を促した理由の1つと見られる。

表 138 主要国における牛肉の推定消費量 1000ト

国	1989	1990	1991	1992
米 国	9,717	10,303	10,915	*
E C	5,855	6,065	6,400	6,630
ブライツ	1,832	1,950	2,308	*
日 本	1,717	1,700	1,766	*
カナダ	727	772	780	795
南アフリカ連邦	564	560	572	567
オーストラリア	430	444	454	464
アイルランド	312	336	393	566
ポランド	320	288	*	*
ユーロペ	250	264	*	*

出所: FAO, * 推定値

表 139 主要国における牛肉の1人年別消費量 Kg/人/年

年次	米 国	E C	ブライツ	日 本	カナダ	南アフリカ
1980	27.2	13.9	9.6	10.2	31.2	7.7
1985	32.1	14.7	9.1	11.2	24.7	14.9
1988	37.0	17.6	11.8	14.0	28.4	15.2
1989	39.3	18.0	12.4	13.9	27.8	14.9
1990	41.2	18.5	13.0	14.2	29.0	14.5

出所: FAO

1) 牛肉の貿易傾向

牛肉の世界貿易量は、年間の約2.5億トンのうち75%は先進国に集中する。同産肉貿易量の供給量は6.3%に相当する。世界の貿易量は減少傾向にあるが、近年増加をみせている。1980~91年間の牛肉の輸入量は年平均5.1%であった。輸出量は年平均5.6%の増加であった。この増加率は前記の通りである。これは9.9%と高く、これは先進国の場合の5%である。

1983~92年の10年間の牛肉の国際価格の上昇傾向は顕著である。

最大の輸出国は米国で、年間平均560千トンの輸出を行っている。これは世界の輸出量の22%に相当する。米国は輸出量の上昇傾向にある。これは92%の肉類、5%の乳製品、残りの肉類と見られる。米国は伝統的に牛肉の輸出に注力しているが、92年以降は肉類の輸出に注力している。

新ノ輸出が減少、他の市場に對する輸出の増加あり、 \Rightarrow 欧少分のカーニバル:

ECの輸出量は全体の17%と占め、相対的に位置する。EC輸出の中70%はフランスとドイツに集中し、42%又43%のシェアを占め、右側の主要国である。 \Rightarrow 両国は伝統的に牛肉の輸出国。80年代中盤に世界の第一位と争ったが、88年以降相対的に抜かれ、今日も11位である。

ECの牛肉輸出は次第にEUの鶏肉主体となる。小国ギリシアや中東部地中海中心の90年代に入ると急速に伸びて見られる。

南米大陸のブラジルが次第に位置する。世界第3位の輸出を行っており、東欧のハンガリーも伝統的な輸出国である。

現在世界第5位の輸出規模を持つタイの輸出増加率が高い。EUに追随する位置にある。最近はその8%の増加を記録し、日本市場の輸出の90%が向かっている。タイ輸出は右側の大型の距離から他の供給国よりも有利な位置にあり、1980年、日本の半分の輸出を目的として現地生産を行っていたためである。

ブラジルのラテンアメリカ最大の輸出国としてサウジアラビアを始め、中東諸国(クウェート、カタール、バーレーン)や拉東諸国(日本、香港、及びシンガポール)への供給を行っており、飼育技術は相対的に高く水準にある。

世界最大の輸入国は日本。世界の牛肉貿易の12%を集中し、その輸入量は年間200万トンを記録している。これは従って日本連関の輸入が最大の世界輸入の11%である。ECの輸入量も最大の世界の主要輸入国と争っている。その原因、ドイツは牛肉の輸入が大きい。

牛肉貿易の可成り、アジアの南米途上国にも向かっている。その代表的輸入国として、サウジアラビアと香港がある。これらの国は国内生産の不足に加え、購買力が高く、肉の需要があり、鶏肉の需要が高まっている。大型の輸入が従っている。その中香港は「韓国」及び「中国」からの供給を受け、サウジアラビアの供給国はEC(主にフランス)及びブラジルである。

表 10 牛肉 主要5国への輸出シェア (%)

国別	1980	1990
米 国	23.5	22.0
E C	40.6	17.0
ブラジル	11.7	11.9
ハンガリー	9.6	7.7
タイ	1.3	5.6

資料: GATT

表 141 牛肉：主要国の輸出推移

国 別	1988	1989	1990	1991
米 国	381.0	398.3	554.3	635.6
E C	402.0	448.0	428.0	441.0
ブラジル	249.3	248.6	337.0	379.0
ハンガリー	240.6	178.7	194.3	165.0
オーストラリア	97.9	110.6	141.6	*
ルーマニア	125.0	120.0	105.0	*
ブルガリア	39.5	35.3	16.8	*
オランダ	15.9	17.2	14.5	*
その他	517.8	662.3	725.6	*
世界計	2,066.0	2,214.0	2,517.0	2,830.0

出所: FAO

*: 推定値

表 142 牛肉：主要国の輸入推移

国 別	1988	1989	1990	1991
日 本	261.0	267.0	301.0	347.0
旧ソ連	178.8	136.1	260.0	289.0
オーストラリア	192.1	194.4	220.0	*
香港	153.0	182.0	184.0	*
E C	103.0	115.0	138.0	145.0
カナダ	46.9	42.2	67.4	79.0
スウェーデン	43.2	41.3	37.8	46.0
南アフリカ連邦	25.9	21.6	18.0	16.6
オーストラリア	15.1	16.9	15.8	17.5
その他	987.0	1090.5	1234.4	*
世界計	2,006.0	2,107.0	2,472.0	2,764.0

出所: FAO

*: 推定値

⇒ 今後の傾向予想

世界最大の産国米国、オーストラリア、ECの牛肉は今後近期中に生産量を増加する見込み。ブラジルは国内需要と海外市場の需要を支え、生産の拡大傾向が継続すると予想される。日本は日本国内需要の増加が期待され、生産コストの上昇も供給量を減少させる。世界的な牛肉消費の増大に伴い、牛肉消費の増大が顕著な国は、肉畜産上国。ブラジルの場合、例として牛肉の比は牛肉の消費の増大に伴って増加する。旧ソ連国は牛肉消費の増加が予想され、各産国間の牛肉の融通が拡大する。牛肉の供給は、牛肉の増大に伴って増加する。

ブラジル産肉類の供給と不況の中東市場への依存度を軽減させる。

中期の見通しとして、飼料コスト（とくに飼料用穀類価格）の軽減が鶏肉生産の経費増大の見通しである。より高い生産性や、近代化設備の導入は更に時向を改善する可能性がある。飼料コストの低下は鶏肉価格を更に下げることが可能で、肉市場の競争力向上につながる。

1995年の鶏肉生産の規模が11%増加する見込みである。一方で、肉類の消費は西側諸国において継続して増加し、長期的にも新たな増大のペースが変化により、鶏肉需要を引き上げる増加が見込まれる。

供給量の増加は工業生産と同様に、米国の計画削減の他、他国からの輸出が大幅に増加する見込みである。

輸出の形は、鶏肉と鶏卵と各部分の割合は、鶏肉が全体の約80%を占め、鶏卵が約20%を占める。ブラジルの場合は、1985年頃からの大豆輸出（米国、EC）の削減が、肉類の輸出競争力に悪影響を及ぼしている。現在のブラジルの鶏肉市場は、輸入品に依存している。ブラジルのABCF（ブラジル輸出協会）によると、現在のブラジルの鶏肉輸出は、肉の37.5%と卵の62.5%が米国の輸出である。鶏肉は肉の丸鶏に比べて価格が1.5倍高いが、品質の要求が高いため、日本への輸出は増加している。

鶏肉の国際価格の年毎に、FAO指数を採ると、1983年を100とすると、1989年は124の最高価格に達し、その後再び下降している。FAOのデータによると、価格変動の要因は次の通りである。

表 143 鶏肉：国際価格の変動

年度	価格 US\$/100kg	指数
1983	29.20	100
84	33.40	114
85	30.10	103
86	34.70	118
87	28.50	97
88	34.10	116
89	36.40	124
90	32.90	112
91	31.11	106

出典: SEC. PROGRAMAS DE ECONOMIA: ARGENTINA

6.2.2 ミルコス-IV 肉の生産と市場

1) プロセッサ

プロセッサ肉の養鶏部門は肉の生産分野で牛肉に次ぐ位置にあるが、その生産高は1980年代後半から低く、養鶏生産高に占める比率は1980年に1.8%、1990年に2.1%に落ちた。この期間中上下の変動は、その成長は鈍化しており、1990年に肉の生産高は1980年に35%増加した。

国内消費は年平均平均 23% で増加しており、今日では国内肉消費量の15%を占めている。国内市場への供給増加は、海外への輸出も促進し、国内需要を補うだけでなく、ミルコス-IV 肉の輸入も行うようになった。

国内の養鶏部門は110万人の労働力と物産しており、その中の60%は生産部門に集中している。生産構造は企業形態、半企業形態、個人経営者の3種類の形態に分かれている。

この中企業形態は養鶏活動の85%を配合飼料工場、養鶏場、貯蔵、輸送及び販売を一貫して行っており、養鶏部門では他の生産者の契約も必要で、ヒナや配合飼料を供給して成鶏を交配する方法をとっている。この形態は20%未満の企業によって行われており、国内の鶏肉取引の大部分を占めている。

半企業形態の生産者のグループによって組織された組合で、ヒナや配合飼料を共同で購買し、鶏舎と工場に共同投資する方法をとっている。

個人の形態は養鶏活動の10%を占め、購入と販売を個人で行っており、生産者を指している。統計資料によればこの部門は国内消費量の3%を供給する重要な部門である。

企業グループの主要な国内企業は CARGIL 社であり、他の主要な国内企業である。CARGIL 社は5%の生産シェアを占めている。これらの企業はミルコス-IVの成長に伴って新しい市場の需要に対応する再整備を行っている。中にはフランスの大企業と合併しているものもある。

プロセッサの鶏卵部門は肉部門よりも成長が速く、60%を占めている。

- ・ 肉生産部門の労働力 120万人 中 鶏卵部門 30万人
- ・ 卵の年間生産量 13,140千箱 (1箱 30打) = 394億打/年
- ・ 売上高 450億 315百万
- ・ 産卵鶏 - 羽割 卵生産量 36枚

v) フラビル

フラビルは市場の中心内競争と価格の相関は、その位置による。その生産量は、2.4百万トンに達してあり、1人平均消費量は32kgと算出される。

フラビルの価格は、1960年代に相対的に安定したものの、優良品種の導入による生産性の向上は、後国外からの需要を支え、その生産の増加を促した。技術の向上による生産規模の拡大は、生産コストの削減を可能とした。国内市場は、安価な肉類との代替品として行われ、高価な牛肉の代替品として消費者の嗜好を表した。

牛肉の飼育数は、約16百万羽に市場の8割に相当する。屠殺の期間に体重が18kgに達する45日間、体重1kgあたり2kgの飼料を消費する。

国内市場は、牛肉の消費量の減少と、海外への輸出の増加により、80年代後半には300千トンの輸出と減少した。90年代後半には再び300千トンの輸出と増加した。450万トンの収入と推定される。

輸出競争は、中東諸国や大規模な生産を促進し、ヨーロッパや、アジアや、ラテンアメリカ諸国への輸出を拡大させた。フラビルの価格は、市場の中心内競争による価格の相関を、市場の競争力と輸出の増加を促した。輸出競争は、競争力と市場の競争力を促進させた。

表 144 フラビルの市場-輸出推移

年度	産量 1,000t	合計 100万t	平均単価 US\$/t
83	289.3	242.2	837
84	289.3	263.5	910
85	277.1	242.9	877
86	225.6	222.2	985
87	210.8	215.9	1024
88	236.6	235.0	993
89	235.0	262.0	1115
90	297.0	324.0	1091
91	314.0	387.0	1232
92	378.0	456.0	1206

出典: CACEX, BANCO CENTRAL

1) シルバーイ

シルバーイは肉質の柔らかさ直撃の部門の1つで、農場水準、11名PV=14.5%
1985/90年と同様にシルバーイは肉質の消費方法から生又は冷蔵品に比べ、冷凍品の消費
費が少額。1人当りの消費量は約9.1kgと推定される。工場施設は少額に菜化
は多に行われる。

⇒ パラフィン

1991年に行われた農場水準のアンケート結果は、肉質の柔らかさ直撃の部門の1つで、農場水準、
21.2%と推定される飼育方法、81%と0.5%の差、1,233,497羽である。飼育
の状況は、首都圏の肉質を推定するに、セキブイ果は約1.769.7千羽、1777,00
羽、肉質の柔らかさ直撃の部門の1つで、農場水準、

70以上の輸出は中央銀行の統計に準拠して行われる(肉類全体の統計のみ)消費量
肉質の統計は、1985/90年の1人当りの消費量は約9.7kgと推定される。

参考文献

DIAGNOSTICO DE COMPETITIVIDAD ASROPECUARIA DEL MERCOSUR TOMO 1, TOMO 2

GUILLERMO JORGE CAMPBELL

ESTUDIO DE COMPETITIVIDAD : OLEAGINOSOS

アグロケミカル事務局、及 U IICA

> : CEREALES

全 上

> : FRUTAS

全 上

> : CARNE

全 上

> : AVIAR

全 上

CENSO ASROPECUARIO NACIONAL

アグロケミカル事務局

ESTIMACION DE LA PRODUCCION ASROPECUARIA

全 上

BOLETIN ESTADISTICO

アグロケミカル 中央銀行

ANUARIO ESTADISTICO 1991

アグロケミカル 地理統計院

INFORMAÇÃO ECONOMICA

アグロケミカル 事務局 農業経済研究会

INTERCAMBIO COMERCIAL DEL URUGUAY

アグロケミカル 中央銀行

報告者作成 1990年3月

TNK CONSULTORIA ECONOMICA LTDA

SÃO PAULO, BRASIL

